

東西の古典における「見る」ことの呪性と恋愛 —神話的原型より文学的トポスへ—

(イタリア) カターニア大学外国語外国文学学部 講師

ルカ・カッポンチェリ

本講演では「見る」ことをめぐる東西の古典比較を主題論として試み、それによって「見る」主体と他者との間ではどのような関係が生じるかを考える。

まず、古代ギリシア・ローマ文化圏の神話に登場するメドゥーサと『故事記』神話のイザナミとの比較を出発点として、両神話において「見る」行為が一種のタブーとしての意味を帯び、それが人間にとって最も他者である<死>の範疇（コスモスに対立するカオス）との交流を断ち切る意味があることを論じる。<生>と<死>の交流を可能とする

「見る」行為は、また古代ローマの著述家プルタルコスしよくたくかんだんしゅうの『食卓歓談集』 *Quaestio Convivialis* に（特に黒海の人々について）言及される「邪視」、あるいは「凶眼」という考え方の根底にもある。但しこの記述では、見る行為には害をもたらすのみではなく、恋愛感情をも引き起こす力があるという一種の二面性が見て取れる。つまりここでは、凶眼と恋愛は対極にありながら、同じ根拠をもった現象であり、「見る」目から放射される流動体によるものとされている。この考え方は古代ギリシア・ローマ神話の根底にあるだけでなく、古典恋愛詩歌にも頻繁に見られる。例えば『名婦書簡』 (*Heroides*) におけるメデアの恋の悲劇を語るオヴィディウスの詩にも、そしてトルヴァドゥールの詩作品にも、一目ぼれによる恋愛感情が理性の喪失、自己消滅、嘆き等に伴っている。恋愛感情は外部の力によって歌い手の意志を支配するといった例が非常に多い。このように、神話的原型を題材とする詩歌表現において、「目が合う」を中心とする一種の文学的トポスが確認できる。

次に、日本の神話における「目が合う」場面を取り上げ、このようなトポスは歌の世界においてどのように展開していったかを考察する。神話の場合における「見る行為」の二面性としては、アメノウズメの眼の呪性（睨みあうことで敵に勝つ）と「国造り」、または求婚に関連する「目合」（マグハイ）の例を取り上げる。歌の世界では、「国見歌」における「見る」ことの呪性、または『万葉集』に収録された「一目ぼれ」の相聞歌に焦点を当てる。後者において、恋が歌い手の我を奪う外的な力として描かれることは、先に述べた西洋の詩歌のトポスに非常に似ていることを指摘する。

両文化圏における神話的原型としての「見る」行為が文学的トポスへ展開することを考察した上で、「愛」という現象は個人の力を上回るものであり、恋する人が魔法に取り付かれているかのように、精神的にも、肉体的にも恋に束縛されるということを主張する。どちらの場合も、恋愛感情は「見る」ことによって発するものであるから、「見る」行為の呪性と恋愛の問題をこの点に指摘できる。